



高齢者の社会参加における学習効果：活動団体の種類による比較

安里, 知陽
竹内, 真純
Kim, Nahyun
片桐, 恵子

(Citation)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 15(2):67-78

(Issue Date)

2022-03-30

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81013203>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81013203>



高齢者の社会参加における学習効果：活動団体の種類による比較

Learning through Social Participation among Older Adults: Comparison of Community Groups

安里 知陽* 竹内 真純** Kim Nahyun*
Chiharu YASUZATO* Masumi TAKEUCHI** Nahyun KIM*
片桐 恵子***
Keiko KATAGIRI***

要約：長くなった高齢期を豊かに過ごすことは、高齢者個人だけではなく超高齢社会全体の課題である。本研究は、豊かな高齢期創出のための手段となる社会参加の学習効果について検討することを目的とした。社会参加の経験から得られる学習について注目し、1. 社会参加を通してどのような学習が得られるか、2. 活動の種類によって学習の内容に違いがあるかについて明らかにした。調査は1. 高齢者大学、2. 絵画教室、3. 就労トライアルの3種類の活動に参加する、60歳から80歳の男女22人を対象にインタビュー調査を実施した。学習を「活動を通じた認識や考え方の変化」とし、これを分析テーマとして分析を行った結果、【自己に関する認識】と【環境に関する認識】の2つのコアカテゴリーが析出された。【自己に関する認識】は自分自身の人生に関する学習であり、【環境に関する認識】は活動参加の重要性への意味づけや地域・社会の情報の獲得であった。また活動の種類ごとに学習に固有の特徴があり、高齢者大学では高齢者としての自覚や目的の明確化、絵画教室では自分がもつ可能性の自認、就労トライアルでは新たな高齢者の存在意味を知るという学習が見いだされた。また【自己に関する認識】と【環境に関する認識】は、相互に影響することが示唆された。

キーワード：高齢者の社会参加、学習効果、高齢者大学、絵画教室、就労トライアル

1. はじめに

2021年にWHOが発表した男女の健康寿命の世界ランキングにおいて、日本は74.1歳でトップとなり、過去最長となった(WHO, 2021)。このように世界一長くなった高齢期を、どのように過ごすかということは高齢者個人だけではなく社会全体の課題になっている。WHO(2002)は、高齢期の豊かさを高めていくことをアクティブエイジングと呼び、高齢者が心身とも健康で、家族だけではなく友人や地域におけるつながりを広げることが重要であるとし、社会参加がその手段の一つであるとしている。特に近年の一人暮らし高齢者の増加や核家族化、個人化による家族の希薄化等から、片桐(2017)は高齢者の社会参加はますます必要になる可能性を指摘している。高齢者の社会参加は、今後も高齢期

を豊かに過ごすための手段の一つとして引き続き重要であるといえる。

高齢者の社会参加率は61%で、社会参加活動で参加率が高いのは、健康維持のための活動やスポーツへの参加、次いで趣味の活動への参加である。また、高齢者が参加したい活動は、趣味の活動が一番多い(内閣府, 2017)。他にグループ活動としての学習は、社会参加全体からみると14.9%と参加率は少ないが、グループだけではなく個人的に行った単発のセミナー参加等を含めると生涯学習に参加したことがある人は比較的多く、60歳以上で55%、70歳以上で42.5%と高齢者の半数近くに上る(内閣府, 2021)。堀(2012)は、学習活動は社会参加の一つとして捉えられる場合があるが、社会参加のきっかけや手段となることを指摘している。

* 神戸大学大学院人間発達環境学研究科博士後期課程
** 神戸大学大学院人間発達環境学研究科・日本学術振興会特別研究員
*** 神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授

(2021年10月7日 受付)
(2022年1月24日 受理)

高齢者の社会参加活動の種類は多様であるが、これまで社会老年学では、家の外で行うグループ活動をひとくくりにして扱うことが多かった。しかし片桐(2017)は、高齢者の社会参加について、社会参画という視点から3つの活動に分類した。1つは趣味や学習等のグループ活動への参加である社会参加活動、2つ目は就労等の生産的活動、これは「有償が無償に関わらず社会に役立つ財を作り出す」活動である。3つ目は政治参加等の「市民が果たすべき活動」である市民参加活動である。この分類は、現代の高齢者と社会の関係について捉えなおし、社会老年学でこれまでそれぞれ個別に検討されてきた領域を包摂する分類である。これらの3種類の活動は、超高齢社会においても、高齢者個人の健康と人生においても重要であることが指摘されている(片桐, 2017)。生産的活動の1つである就労は、少子高齢化の人材不足への対策の1つとしても注目されている。高齢者の就労率は、2014年から2019年の5年間で、65歳から69歳で40.1%から8.3ポイント上昇し、70歳から74歳で24%から8.2ポイント、75歳以上は8.1%から2.2ポイントの上昇と、年齢の上昇にともなって上昇幅は小さくなるものの、高齢者全体で増加している(内閣府, 2021)。人材不足がさらに深刻化すると予測される日本において、今後ますます高齢者の就労は重要であると考えられ、片桐の定義における生産的活動領域は今後もさらに重要になるといえる。

社会参加の効果については、健康増進や生きがいの創出、地域とのつながりという効果が報告されている(片桐, 2012)。また、高齢期の学習活動への参加は、認知機能の低下を抑制させることが分かっている(小長谷ら, 2013)。高齢期の学習は、社会的排除をなくし生活の質を高めるとされ(Glendenning, 1995)、内閣府の調査(2017)では、学習活動を行った効果について、「人生がより豊かになっている」が、60代で59.5%、70代以上で63.2%と最も多かった。豊かな高齢期創出において、学習の必要性が示された結果といえる。

高齢者の社会参加における学習については、学習活動への参加以外に、ボランティア活動等の学習を目的としない活動においても学習の効果が期待できることが指摘されている(片桐, 2017)。片桐(2017)は、高齢期の社会参加は現役時代とは違う平等規範やコミュニケーションスキルが必要であるとし、これらの能力は活動への参加を通して学習することが可能であると指摘している。Cheng(2016)は、ボランティア活動への参加を通して、仲間との関係から知識や知恵等の学習が得られたことを確認した。また田中(2011)は、ボランティア活動を通して新しい知識やつながりの大切さ、次世代育成の重要

性等の学習が得られ、価値観が変化したことを見出した。

Jarvis(1987)は、学習は経験が知識や態度、価値などへ変換される変化のプロセスであるとしており、この議論に則れば社会参加を通じた学習は新たな価値の形成へとつながるといえる。Jarvisはこれまでの経験であたりまえだと思っていたことが、新しい経験ではあたりまえではなくなった場合に学習が生じるとしている(Jarvis, 1995)。つまり、新しい経験によって、これまでの経験が土台になって学習が生じるということである。高齢者がボランティア等の社会参加を通して平等規範やコミュニケーションスキル、次世代育成の重要性等に関する学習をすることによって価値観を変化させることは、ひいては社会への影響も考えられることから、高齢者個人の人生の豊かさだけでなく、社会全体にとっても利益となると考えられる。

また個人が人生で得た経験は、成人の学習の貴重なリソースになる(Knowles, 1984)ことから、経験が多い高齢者はより学習効果が高まる可能性があると考えられる。Moody(1986)は、これまでの経験の多さが学習効果を高めることを前提としたうえで、高齢者は情報を得る学習よりもこれまでの経験が強みとなる経験を通じた学習の推進の必要性について言及した。このように高齢者の社会参加は学習効果が高いことが期待されるが、これまで社会老年学では、社会参加をするかしないかの議論が中心であり、効果については健康や幸福感、社会関係の広がり等への検討が多く、学習効果についてはあまり議論されてこなかった。

Jarvis(1987)による学習の定義では、経験によって学習が起きた際には知識や態度、価値等の変化が生じるということであるが、学習が起きていても学習したことに本人が気付かないことがあることが指摘されている(Merriam, et al., 2007)。社会参加を通じた学習についても、同様に本人がそれに気づかないことがあると考えられる。このような学習は「自己の経験した出来事を振り返ることを通じて明らかになる(末本, 2016)」とされていることから、インタビューで経験を振り返ってもらう等、本人の自覚を促す必要がある。

これまでの社会参加の研究では、様々な活動をひとまとめにして検討したものや、ボランティア活動など1種の活動からその効果を検討したものが多い。しかしHowell, Kinnevy & Mann(1999)は、学習活動とボランティア活動の2種類の活動を同時期に行うというプログラムに参加した高齢者を対象にし、それぞれの効果の違いについて検討した。その結果、学習活動では友人ができたことと学習意欲が増したこと、ボランティア活動では、社会の役に

立ったことややりがいを得たという、2種類の活動、それぞれにおいて参加者が違う効果を自認していたことが確認された。

社会参加をひとまとめに捉えた効果の検討や、逆に1種類の活動からの検討は、どのような活動に参加しても同様の効果が得られるのか、あるいは活動の種類によって効果が異なるのかを明らかにし得ない。しかし、Howell, Kinnevy & Mann (1999)の研究は、活動効果を比較することによって、活動によって得られる効果に違いがあることを明らかにした。特に学習効果については、活動の種類によって経験する内容に違いがあると考えられ、参加者の学習に影響する可能性が考えられる。このため活動による学習効果を複数の活動から比較検討する必要があると考えられる。社会参加における学習効果が、どのような活動に参加しても同様に得られるのか、あるいは活動によって学習の有無や学習内容に違いがあるかについて明らかにすることは、社会参加による学習効果というこれまで社会老年学で十分に明らかにされてこなかった社会参加の効果を明らかにすることになる。

2. 本研究の目的

本研究では、高齢者大学、絵画教室、生きがい就労の3種類の活動から以下の2点について探索的に検討することを目的とした。

- 1) 社会参加を通してどのような学習があるか
- 2) 活動の種類によって学習に違いがあるか

高齢者大学、絵画教室、生きがい就労の3種類の活動について本研究では、高齢者の社会参加の手段としての学習活動として高齢者大学を、趣味的な活動として絵画教室を、生産的活動として生きがい就労を取り上げた。近年、60代の半数が働くようになった現状において就労は重要である。その中でも生きがい就労は、高齢期の豊かさの創出を目的とした就労であることから本研究の視点に近いと考え取り上げた。

高齢者大学とは、高齢者を対象とした市民講座やクラブ活動等を行う施設である。高齢者大学は自治体主催の場合が多く、高齢者を取り巻く社会状況等に応じて、活動や講座内容を変更する傾向があるという特徴がある(牧野, 2009)。近年では、地域活動の担い手育成という社会からの需要の高まりから、ボランティア活動への参加をカリキュラムに組み込む等の取り組みを行っている高齢者大学が増えている(瀬沼, 2010)。先行研究では、自治体主催する高齢者大学における参加者の個人的な変化について言及されているが(牧野, 2009)、具体的な変化の内容については系統的な整理はされていない。

生きがい就労とは、生計維持というより、生きがいや「心の豊かさ」を目的とした、小遣い程度の有償活動を意味する(瀬沼, 2014)。これは、経済活動中心の活動とは区別され、「無理せず働きたい」という高齢者の就労ニーズに対応する、経済活動と非経済活動との間にある働き方だと言える(瀬沼, 2014; 山口・大湾・佐久川・田場・榮口・大川・糸数・坂東・前泊, 2014)。生計目的の就労は経済的な目的のみで活動する場合があり、高齢者大学や絵画教室と目的や意欲に違いがあることが考えられる。就労の目的は、参加者の活動に対する価値や捉え方に反映することが考えられ、学習へも影響すると考えた。本研究では、生産的活動の一つという視点に加え、活動の種類による学習の違いを検討する目的のために、経済活動としての就労ではなく、生きがい就労について検討した。生きがい就労は、高齢者大学や絵画教室のように楽しみや生きがい創出を目的とした活動であることから、活動内容や種類の比較に際しては条件として有効であると考えた。

3. 方法

1) 調査概要

高齢者大学、絵画教室、生きがい就労の3種類の活動に参加した高齢者を対象に、インタビュー調査を行った。

2) 調査対象

①対象施設

対象施設は3種類で、自治体の高齢者大学2施設、絵画教室1施設、兵庫県宝塚市が主催する「宝塚市健康・生きがい就労トライアル(以下トライアル就労)」事業に参加した9施設であった(表1)。高齢者大学2施設はいずれも兵庫県内の自治体主催の施設で、1つはボランティア養成講座(施設A)、もう1つは美術・工芸コース(施設B)であった。施設Aは、2年で修了のコース、施設Bは4年のコースと修了期間は違うが、いずれも受講者は在籍中に教養講座の受講とボランティア活動の参加を経験した。コース選択については、応募時に希望コースが定員オーバーの場合には落選することがある。

絵画教室は、兵庫県内にある絵画教室(施設C)で、受講者はグループで絵画制作を行う。講師1人に対して5～7人程度が一緒に受講し、教室のメンバーは、30歳代から80歳代までで構成されている。

トライアル就労は、生きがい就労プログラムとして高齢者の自由な時間の充実、健康増進と生きがい創出のための就労機会を市内の高齢者へ提供する宝塚市が行ったプログラムであった。宝塚市が働きたい高齢者を市報にて募集した。一方高齢者就労の受け入れを希望した市内の高齢者施設が3か月の期間を限定して雇用した。3か月のトライアル就労終了

後は、参加者の希望に応じて本契約を結ぶことも可能であった。トライアル就労は、2019 年 5 月から 7 月（第 1 期）と 2019 年 11 月から 2020 年 1 月（第 2 期）の 2 回実施された。プログラムに参加した施設のうち、インタビュー調査への協力を得た施設は第 1 期 1 施設（高齢者複合施設：施設 D）と第 2 期 2 施設（介護老人保健施設：施設 E、高齢者複合施設：施設 F）であった。なお、高齢者複合施設とは、施設内に 2 種類以上のサービスがある施設のことを指し、本調査の対象施設は特別養護老人ホームと介護付き有料老人ホーム、介護付きケアハウスのサービスがある施設であった。トライアル就労参加者の職種は、資格を必要としない介護助手で、主に食事の配膳下膳、風呂掃除等の生活介助であった。

表 1 調査協力施設の概要

活動団体	施設	対象	期間	内容
高齢者大学	施設 A (ボランティア実践コース)	56歳以上	2年 90分/週	地域の歴史や文化、地域活動の課題等の教養講座と地域貢献活動のボランティア参加
	施設 B (美術・工芸コース)	57歳以上	3年 週2日 3時間/日	健康、スポーツ、自然、地域の歴史、文化等の一般教養講座と絵画、版画等の美術と陶芸の実習。在学中に地域のボランティアに参加
絵画教室	施設 C	中学生以上	週 1 日 2時間/日	講師一人に対して受講者 5 人から 7 人のグループで行う絵画教室。 学習内容は洋画全般（油、水彩、パステル等）
トライアル就労	施設 D（高齢者複合施設） 施設 E（介護老人保健施設） 施設 F（介護老人保健施設）	60歳以上	3か月 週2日 2時間/日	兵庫県宝塚市主催。 希望した市内の高齢者施設で、3か月間のトライアル勤務。職種は、介護助手、直接介護を伴わない配膳下膳、風呂の清掃等の生活介助。

②調査協力者

兵庫県在住の 60 歳から 80 歳まで（平均 69 歳、SD=4.86）の男女 22 人（男性 7 人、女性 15 人）であった。

全施設共通の調査協力者の条件を、現役世代の役割を終えて高齢期の社会参加を行う人が対象となるように、60 歳以上で定年退職や子育てが終了した男女としたが、調査協力者の選出方法については、施設ごとに異なった。

選出方法は、施設 A は施設 A で活動を行った調査者の知人 1 人に、同時期に活動を共にした活動仲間の中から 2 ～ 3 人の紹介を依頼した。

施設 B は、調査に関する窓口となる施設の担当者を紹介して、調査協力者の条件を説明し、2 ～ 3 人の選出を依頼した。

施設 C も、施設担当者に条件に合った受講者 3 ～ 6 人の調査協力者の選出を依頼した。

施設 D、E、F については、トライアル就労に参加した 9 施設のうち、調査協力を承諾した 3 施設から調査協力者の選出を行った。施設 D と E には、単独で仕事をする参加者とペアで仕事をする参加者がいたことから、単独活動者とペア活動者それぞ

れ 2 ～ 3 人の選出を施設担当者に依頼した。施設 F は条件に合う、2 ～ 3 人の選出を施設担当者に依頼した。

各施設で選出された対象者のうち、調査協力への承諾が得られた 22 人を調査協力者とした。

③調査時期

2016 年 8 月から 2020 年 1 月にインタビュー調査を行った。

高齢者大学については、2017 年 8 月から 9 月に施設 A、2017 年 7 月に施設 B の調査を行った。調査協力時は 2017 年 3 月に活動を終了した後、5 ヶ月後であった。絵画教室については、2016 年 8 月から 11 月に調査を行った。定められた活動終了期間がないため、協力者は調査時も活動継続中であった。トライアル就労については、施設 D は 2019 年 7 月、施設 E と施設 F は、2020 年 1 月に、いずれも活動期間終了前後 1 週間に調査を行った。

④調査内容

インタビュー内容は、活動中に感じたことや活動中に変化した行動、また活動を始めてからの日常生活における行動や考え方等の変化について質問した。

⑤実施方法

インタビューはすべて、1 人のインタビュアーによって行われた。調査形態は、協力者 1 人の個別インタビューか、協力者 2 人または 4 人でのグループインタビューであった。インタビューは半構造化で行い、インタビュー時間は 35 分から 2 時間（平均 52 分）であった。

インタビューは、調査協力者の活動終了後に、施設の一部屋を借りて行った。インタビュー開始前に調査の目的等を口頭で説明し、IC レコーダーによる録音の許可を得た。また録音されたインタビュー内容を逐語し分析することを説明した。その際、個人が特定される内容は公開しないこと等、調査における倫理に関する説明を行い、インタビューの承諾を書面で得た。なお、本調査は神戸大学大学院人間発達環境学研究科の研究倫理委員会の承認を得て実施した。

⑥分析方法

調査データの分析については、活動を通じた学習を「活動で得られた変化」と捉え、分析テーマを「活動を通して変化した認識と考え方」と設定した。

分析に際しては、佐藤（2008）の『質的データ分析法』を参照し、次の方法で行った。まず、調査協力者の ID は、活動団体、施設、協力者をアルファベットと数字で示した。高齢者大学を K、絵画教室を P、トライアル就労を S で示し、施設を A から F で示した。協力者個別番号は施設ごとに 1 から通し番号を付した。したがって例えば、高齢者大学の

施設Aの個別番号1の協力者のIDは、KA1となる（表2）。IDを付した後、協力者の発言から一定の意味のまとまりに従ってコーディングを行った。次に、各コードの内容に従ってより抽象度の高い[概念]の検討を行った。協力者ごとの発言と[概念]を整理するためコード・マトリックスを作成した。コード・マトリックスとは、協力者を縦軸、「概念」を横軸として、協力者の発言を概念ごとに並べて示す一覧表である。コード・マトリックスを使用して、欠損データや発言が極端に少数の「概念」の有無のチェック、活動団体の比較を行い、[概念]同士の関係から〈カテゴリー〉にまとめ、〈カテゴリー〉間の関係から【コアカテゴリー】にまとめた。それぞれの段階で、コード、概念、カテゴリー、コアカテゴリーの抽出について調査者1人が提案し、社会心理と老年学の専門家2人、大学院生5人で導出した。

なお、高齢者の社会参加では、1つの活動のみへの参加の場合や複数の活動への参加の場合、また活動の参加動機や個人の経験の違い等が認識の変化や考え方に影響すると考えられる。このためインタビュー調査及び分析は、語られたエピソードに対してこれまでの経験、家族や友人などの個人的な要因の影響があったか等を確認しながら行った。

4. 結果

1) 調査協力者の概要

調査協力者の概要を表2で示した。

男性は7人、女性は15人であった。男女に偏りが見られたのは、本プロジェクトへの参加者に男性が少なく、女性の参加者が多かったためであった。

2) 活動を通した認識と考え方の変化

調査協力者から語られた発言について、分析テーマに基づいて分析を行った結果、13[概念]が抽出された。13[概念]を意味内容からまとめた結果、6〈カテゴリー〉が析出され、最終的に2つの【コアカテゴリー】が析出された（表3）。

まず、2つの【コアカテゴリー】の定義について述べる。

【自己に関する認識】は、自分自身に関する考え方や認識の変化であり、自分自身がこれまで気づいていなかった自分の側面や高齢期になった自分に対する新たな見方や気づきである。

【環境に関する認識】は、活動参加に対する認識の変化であり、高齢者の社会参加に対する価値と捉え方、活動参加によって得られる地域や社会の情報や課題についての認識の変化である。

なお、本分析結果で使用する「環境」とは、調査協力者が参加したグループ活動（高齢者大学、絵画教室、トライアル就労）に関連する学習施設や勤務

表2 調査協力者の概要

活動団体	施設	ID	性別	年齢	配偶者	最終学歴	参加期間	概要
高齢者大学	施設A	KA1	男	60代	有	大学	2年	平均年齢：平均67.5歳 (SD=4.46, 最小64歳, 最大75歳) 社会参加経験：4人が、定年退職して初めての社会活動への参加。1人がスポーツ教室にも参加。
		KA2	女	70代	無*	大学		
		KA3	男	60代	有	大学		
		KA4	女	60代	無*	大学		
	施設B	KB1	男	70代	有	高専	4年	
		KB2	男	60代	有	大学	4年	
絵画教室	施設C	PC1	男	60代	有	大学	12年	平均年齢：平均70.7歳 (SD=4.72, 最小65歳, 最大76歳) 社会参加経験：他の趣味活動参加3人、宗教活動参加一人
		PC2	女	70代	有	短大	17年	
		PC3	女	60代	無*	短大	15年	
		PC4	女	70代	無*	短大	16年	
		PC5	女	70代	有	大学	15年	
		PC6	女	60代	無*	大学	13年	
トライアル就労	施設D	SD1	男	80代	有	大学	3か月	平均年齢：平均69.4歳 (SD=5.32, 最小60歳, 最大80歳) 社会参加経験：1人は定年退職後すぐの参加、他の趣味活動参加は5人、他の就労団体に参加1人
		SD2	男	70代	有	高校		
		SD3	女	60代	有	大学		
		SD4	女	70代	無*	高校		
		SD5	女	60代	無	高校		
	施設E	SE1	女	60代	無*	高校		
		SE2	女	60代	有	高校		
	施設F	SF1	女	60代	有	不明		
		SF2	女	70代	有	不明		
		SF3	女	70代	有	大学		
		SF4	女	60代	有	短大		

(*は不明)

表3 活動を通した認識と考え方の変化 カテゴリー表

【コアカテゴリー】	〈カテゴリー〉	[概念]
【自己に関する認識】 (35)	〈今まで気づかなかったニーズ〉 (13)	[現在のニーズ](6) [未来のニーズ](7)
	〈自分自身の価値〉(12)	[新たな自分の発見](4) [自分の成長への気づき](8)
	〈高齢期の変化に対する捉え方〉 (10)	[年齢の受容](3) [健康に対する認識の変化](7)
	〈活動参加の価値〉(15)	[友人・仲間の重要性への気づき](5) [関与の重要性への気づき](10)
【環境に関する認識】 (49)	〈高齢者の価値〉(18)	[高齢者の強みへの気づき](15) [高齢期に伸びる能力への気づき](3)
	〈地域と社会に関する情報〉(18)	[活動団体の実情の把握](7) [社会に対する新たな視点](6)
		[地域情報の入手](5)

(注 () 内は発言数)

施設、これらの施設が関わる地域や社会、また活動で出会う仲間等、活動参加で協力者が活動を通して関わる要素を指すものとする。

これらの2つの【コアカテゴリー】について、〈カテゴリー〉ごとに分析結果を述べる。発言はイタリック文字で示し、[] は方言等の部分の補足、{ } は逐語録からの筆者の補足である。また、発言後部の() は、発言者と発現者における発現番号を示す。

I. コアカテゴリー【自己に関する認識】

自分自身に関する考え方や認識の変化であり、〈今まで気づかなかったニーズ〉〈自分自身の価値〉〈高齢期の変化に対する捉え方〉の3つのカテゴリーを含む。

①カテゴリー〈今まで気づかなかったニーズ〉

活動をしていく中で、参加する前には気づいていなかった自分の興味関心や目標に気づいた様子がイ

ンタビューの発言から捉えられた。

「3年というても、授業数は少ないですから {中略} もうちょっと絵の授業専門的にやっても良かったかな (KB2-4)」

「自分のための家事じゃない、誰かのための家事というのが良い (SD4-7)」

これらの発言は、参加した活動を通じた経験から、満足や不満などの感情を通して、自分ではそれほど意識していなかった興味や楽しみ、活動を通して得たいものという「現在のニーズ」への気づきについての発言と考えられる。

「続くと思ってなかったけど、自分の中でこれからこれを趣味としていけるのは、楽しみです (PC1-2)」

「車いす押していてもね、ありがたいいうてずうっと言ってるおばあちゃんもいるし、もう行けへん言うたら、頑固の一徹で {中略} ああなるほどな、こんな人もいてはるんやなと。そういう頑固なじじいやなしね、やっぱりかわいいおじいちゃんになりたいな (KB1-14)」

これらの発言は、これまで考えていなかったこれからの人生の楽しみや老後の理想像への気づきという「未来のニーズ」への気づきに関する発言と捉えられる。

② カテゴリー〈自分自身の価値〉

「現役で働いていた時は感じなかった、働くってこんなに楽し [い] んやと初めておもいました (SD4-2)」

「私、年寄さんがすきなんだと (SF1-2)」

これは、これまで気づいていなかった楽しみや好みに気付いたという「新たな自分の発見」と捉えた。

「女性の特殊性、もう本当に嫌やったんやけどね、ちょっとましになった。すごく良かったと思う (PC1-4)」

「テレビなんか見るとすごくより絵の、美術のこととか見てても分かりやすくなった (PC3-3)」

これは、自分自身がネガティブに感じていたことに対する克服や、自分の知識や能力が伸びたことというような「自分の成長への気づき」に関する言及といえる。

これらの言説は、ポジティブな自己の側面に対する発見や気づきであることから、カテゴリーを〈自分自身の価値〉と設定した。

③ カテゴリー〈高齢期の変化に対する捉え方〉

年齢によって定年退職し、高齢者としての自分を受け入れがたかったというこれまでの捉え方から、活動へ参加していく中で高齢者としての自分を受け入れられるようになったという「年齢の受容」を得ていた。

「辞める前が2年間、30代の会社におったでしょう。若者と同じ職場にいたから、で、辞めてこっち {高齢者大学} きたら、いきなり、{平均} 69歳でしょう。ショックが大きかったね。今考えた良かったと思うよね。早く慣れて (KA3-5)」

「年齢怖かった、はじめ入った時、ほ [それ] でも、{活動に参加して} 目標っていうか、こんなんで集まってきてますっていうから、まだしゃべれる (KA4-7)」

また、活動をはじめるとなると、健康管理への意識が高まり、健康への自信というような「健康に対する認識の変化」が得られたことが捉えられた。

「{高齢の入所者と接することで} 健康に気をつけますよね。意識は {中略} 前より高まった (SD3-5)」

「{年齢が近い入所者を見て} 健康管理が大事やなと (SF4-1)」

これらの言説は、高齢期の変化の中で特に注目される側面である年齢や健康に関する変化であることから、〈高齢期の変化に対する認識の変化〉と命名した。

Ⅱ．コアカテゴリー【環境に関する認識】

活動参加や活動を取り巻く状況に対する認識の変化であり、〈活動参加の価値〉〈高齢者の価値〉〈地域と社会に関する情報〉の3つのカテゴリーを含む。

① カテゴリー〈活動参加の価値〉

活動におけるモチベーションや活動参加の意義を高めるために、仲間の存在が欠かせないということに気付いたという「友人・仲間の重要性への気づき」に関する言及があった。

「モチベーションが保てたのは {中略} 3年間同じ部屋で (中略) 5人、10人のチームごとに分

かれて〔中略〕苦勞を共にしてきた(KB1-4)」「人との関わりもできるし、それで頭の体操にもなるし(PC2-5)」

また、主体性や積極性をもった活動への関わり方が、活動の意義を高めるということに気付いたという〔関与の重要性への気づき〕に関する発言も得られた。

「〔座学は〕面白いだけでおわっちゃう。自分がそこに参画しないとね(KA3-1)」
「現場に入って初めてわかるっていうか、勉強させてもらうことが多い(SD1-11)」

友人や仲間、活動への関与度の大切さへの気づきは、活動への参加が仲間や関与度によって、さらに意味のあるものになるという価値への気づきであると捉えられることから、〈活動参加の価値〉と設定した。

②カテゴリー〈高齢者の価値〉

高齢者という存在がグループへ参加する際にマイナスではなく、むしろプラスになるということに気付いたという〔高齢者の強みへの気づき〕や、加齢にともなって伸び続けている能力の認知という〔高齢期に伸びる能力への気づき〕に関する言及があった。

「若い時は、時間にも振り回されるし、仕事にも振り回される〔中略〕70歳になると、一歩も二歩も引いて自分も見られるし、世の中も見られるしってなるから、そういうのが、これから高齢者が働くのに良い面じゃないかと思いません(SD4-3)」
「〔高齢者施設の〕入所者さんから、私たちが子供の年代だから、私たちと話したがる(SE1-3)」
「〔高齢期は〕年々物を見たら深く、深く見られる。やっぱり、年とともにね。いろんなものが(PC4-4)」

これらの発言の特徴的な点は、自分が高齢期に得た変化を、一般的な高齢者の特徴として捉え、客観性のある言葉で語ったことである。これらの語りからは、活動の参加において、高齢者という存在にプラスの側面があることへの客観的な気づきと捉えられることから、〈高齢者の価値〉と設定した。

③カテゴリー〈地域と社会に関する情報〉

活動に参加することで、活動団体や地域に関するこれまで知らなかった実態が分かったという〔活動

団体の実情の把握〕や、これまで意識していなかったことに対して社会的関心が芽生えたという〔社会に対する新たな視点〕が得られたことが語られた。

「いろんなノウハウをね、グループ活動なんか教えてもらったんだけど、なかなかそれを実践するところが〔自分の地域に〕ないわけ(KA2-2)」
「〔高齢者施設は〕私の母が入所して〔い〕て、でも外部からだったし、実際一緒に〔仕事〕するようになって、ああ大変だなと(SF2-1)」
「今までは〔高齢者施設での虐待について〕新聞読んだりテレビみたり、そうやねんと思うだけ。やる人は悪いことやけど、なんか落ち度が他にあったんかなとか思うようになりましたね(SD1-9)」

他に、これまで自分一人では収集できていなかった地域の情報が、活動への参加がきっかけで得られたという〔地域情報の入手〕に関する発言があった。

「〔やりたいと思ってた〕横笛教室を教えてもらった(KB2-6)」
「教会のバザーを教えてもらった(PC2-6)」

これらの言説は、これまで自分が知っていた団体や地域、社会の認識に、活動参加によって新たな情報が追加されたり、新たな認識が得られたりしたことがうかがえる。よって〈地域と社会に関する情報の獲得〉と名付けた。

3)「活動を通した認識と考え方の変化」における活動団体ごとの違い

次に上記分析結果に基づき、高齢者の活動を通した変化について活動団体で違いがあるかを検討するため、〔概念〕の発言数を比較した(表4)。

すべての活動団体において言及が見られたカテゴリーは、〈活動参加の価値〉であった。その他のカテゴリーについては、3つの活動団体により発言に偏りが見られた。

まず、高齢者大学で発言数が多かった概念は、〔現在のニーズ〕、〔年齢の受容〕、〔関与の重要性への気づき〕の3つであった。特に〔年齢の受容〕は、高齢者大学でのみ発言があった。

次に、絵画教室は、〔自分の成長への気づき〕と〔高齢期に伸びる能力への気づき〕に関する発言が、他の活動団体に比べて多かった。〔自分の成長への気づき〕は、他の活動団体では発言が少なかった概念であったが、絵画教室の中では他の概念に比べても一番発言が多く得られた概念であった。また、〔高

表4 「活動別発言数」

	高齢者大学 n=6	絵画教室 n=6	トライアル就労 n=10
【自己に関する認識】	9	11	15
〈今まで気づかなかったニーズ〉	6	3	4
[現在のニーズ]	4	-	2
[未来のニーズ]	2	3	2
〈自分自身の価値〉	-	8	4
[新たな自分の発見]	-	1	3
[自分の成長への気づき]	-	7	1
〈高齢期の変化に対する捉え方〉	3	-	7
[年齢の受容]	3	-	-
[健康に対する認識の変化]	-	-	7
【環境に関する認識】	10	15	24
〈活動参加の価値〉	7	3	5
[友人・仲間の重要性への気づき]	1	2	2
[関与の重要性への気づき]	6	1	3
〈高齢者の価値〉	-	8	10
[高齢者の強みへの気づき]	-	5	10
[高齢期に伸びる能力への気づき]	-	3	-
〈地域と社会に関する情報〉	3	4	11
[活動団体の実情の把握]	1	-	6
[社会に対する新たな視点]	-	1	5
[地域情報の入手]	2	3	-

(注 「-」は、発言がなかったカテゴリーと概念)

齢期に伸びる能力への気づき」については、絵画教室のみで発言があった。

最後にトライアル就労で特徴的に発言が多かったのは、[健康に対する認識の変化]、[高齢者の強みへの気づき]であった。中でも[健康に対する認識の変化]は、トライアル就労のみで発言が得られた概念であった。また[高齢者の強みへの気づき]は、トライアル就労の中で他の概念と比較しても最も発言が多かった。

5. 考察

本研究は、1. 社会参加を通してどのような学習があるか、2. 活動の種類によって学習に違いがあるかの2点を検討することを目的として、高齢者大学、絵画教室、高齢者施設におけるトライアル就労の3種類の活動を通した高齢者の学習を検討した。その結果、【自己に関する認識】【環境に関する認識】の2つのコアカテゴリーが抽出された。【自己に関する認識】については、〈今まで気づかなかったニーズ〉〈自分自身の価値〉〈高齢期の変化に対する捉え方〉の3つのカテゴリーが、【環境に関する認識】については〈活動参加の価値〉〈高齢者の価値〉〈地域と社会に関する情報〉の3つのカテゴリーがそれぞれ見出された。

1) 社会参加を通した学習の内容

「活動を通した認識と考え方の変化」からは、コアカテゴリー【自己に関する認識】は自分自身や人生に関する学習、コアカテゴリー【環境に関する認識】は活動へ参加することに対する重要性への意味づけという学習と捉えられる。

自分自身や人生に関する学習は、自分の活動目的や目標への気づき、これまで気づかなかった自分の発見、高齢期に訪れる変化への受容等であり、これまで気づかなかった今までとは違う自分や、これらなりたい自分についての学習であると捉えられる。

藤岡(2008)は、活動参加へ影響する「顕在的ニーズ」と、活動を行う中であぶり出される「潜在的ニーズ」の存在を示している。藤岡のいう「潜在的ニーズ」とは、本研究結果における、〈今まで気づかなかったニーズ〉に当たると考えられる。また、佐伯(1975)は、学習とはなりたいたい自分になることと述べているが本研究からは社会参加によって、これまで気づかなかった自分への気づきという、なりたいたい自分があることを知るという学習が得られることが示された。

活動へ参加することに対する重要性への意味づけという学習は、活動への参加を有意義にするための重要な要因への気づき(〈活動参加の価値〉)や、高齢者が活動へ参加することの利点への気づき(〈高齢者の価値〉)から捉えた。このような学習は、高齢者が活動団体へ参加することに対する意味づけであると考えた。

佐伯(1975)は、「自分なりに納得がいく」だけではなく、「別の見方」、自分の中の「他人の目」から吟味し、捉え直していくという学習があることを指摘している。本研究においても、自分が経験で感じた視野の広がりという高齢期の変化が、高齢者就労において役に立つ良いところ(〈高齢者の価値〉)と捉えた発言や、友人や仲間との関係が築かれることが活動のモチベーションになる(〈活動参加の価値〉)と捉えた発言からは、自分が経験したことについて活動を通して別の見方から捉え直すという学習があったと捉えられる。このような学習も、高齢期の活動に新たな意味を持たせることにつながった学習と考えられる。さらに、社会参加によって地域や社会の情報を得るという学びもあることも示された。

2) 活動団体の特徴から見た、活動団体別学習の特徴

「活動を通した認識と考え方の変化」の活動団体ごとの特徴について考察する。

まず、カテゴリー〈活動参加の価値〉はすべての活動団体において言及されていた。〈活動参加の価値〉は、活動内容に関わらず、社会参加によって得られた変化であると考えられる。団体で行う活動は、どのような活動内容であっても、友人や仲間とのつながりが得られ、活動を通して地域、社会との関わりも生まれる。これらは社会参加に重要なリソース

である（片桐，2012）。調査協力者はそれぞれの活動への参加経験を通して、社会参加によって得られるこのようなリソースが、高齢者の活動において重要な役割を果たすことを学んだと考えられる。

次に、3つの活動団体でみられた異なる特徴について記述する。

・高齢者大学の特徴

高齢者大学は、[現在のニーズ]や[関与の重要性への気づき]、[年齢の受容]に関する発言が多かった。これは、高齢者大学の活動内容と参加者の活動参加へのきっかけが原因であると考えられる。高齢者大学は、講座受講、ボランティア参加、班やグループ単位での活動など、期間中に大学内の仲間と一緒に様々なタイプの活動へ参加するという点で、他の活動団体と異なっていた。このことが、活動の関与度の違いを比較する機会になり、活動へどのように参加することが活動意義をより高めることができるかという[関与の重要性への気づき]につながったと考えられる。また本研究の調査協力者6人中5人が定年後初めての社会参加で、「[他のコースに}落ちて{このコースになった} (KA1-1)」、「[他のコースより}まだ興味があつた (KB1-1)」というような、明確な目的意識というより「自分のやりたいこと (KA3-3)」を探して高齢者大学に申し込んでいた。このような背景からは、他の活動への参加者と比べて、目的探しの意識が潜在的に高かった可能性が考えられる。

高齢者大学で[年齢の受容]が多かった理由については、定年退職後初めて社会参加した協力者が多かったという協力者の特徴と、1つの場所に「高齢者」として集められ年上の高齢者と同じ目標をもって活動に参加するというカリキュラムに関する特徴の2つが原因であると考えられる。年上の高齢者と同じ目標を持って共同作業を行う活動があるのは、本調査においては高齢者大学のみであった。定年退職者は、退職後社会的変化に対応するための課題が多く、特に退職後の高齢者としての自覚や目的の明確化は定年退職者の社会参加促進において重要な要因である（片桐，2012）。本研究結果からは、このような定年退職者にとっての、第一歩である高齢者としての自覚([年齢の受容])や明確な目的意識([現在のニーズ])への気づきについての学習が高齢者大学の学習の特徴として捉えられる。

・絵画教室の特徴

絵画教室では、[自分の成長への気づき]と[高齢期に伸びる能力への気づき]で発言が多く得られた。これは、美術という活動内容の特徴と、活動継続期間が長いという協力者の特徴の2つが関連して

いると考えられる。美術に関連する能力である「美的感受能力」は、加齢とともに伸びることが示されている（石崎・王，1999；Persons, 1987）。美術学習は、加齢によって伸びた「美的感受能力」に気づく機会が多かったと考えられる。また、このような能力の変化に自ら気づくためには、気づきへつながる経験や体験の多さ、つまり活動期間の長さも関連すると考える。高齢者大学の6人のうち2人も美術・工芸コース選択であったが、「高齢期に伸びる能力への気づき」に関する発言はほとんどなかった。高齢者大学と絵画教室の特徴の違いは、参加協力者の美術に関する活動経験の長さである。このことから、美術であることと長期活動継続という要因が[自分の成長への気づき]と[高齢期に伸びる能力への気づき]につながったと考えられる。

[自分の成長への気づき]と[高齢期に伸びる能力への気づき]は、いずれも自分がまだ成長できているということへの気づきである。このような気づきは、自分の可能性の存在を自認する学習と言え、美術教室で得られる学習の特徴と捉えられる。このような学習は、加齢に伴ってできなくなることを多く経験する高齢者にとっては、重要な学習といえる。

・トライアル就労の特徴

トライアル就労で一番多かったのは、[健康に対する認識の変化]と[高齢者の強みへの気づき]であった。これらの発言が多かった要因は、活動施設が高齢者施設であったためと考えられる。トライアル就労参加者は、高齢者施設で勤務することで、活動を始めてから介護される高齢者を目にする機会が増えた。このことが、健康管理への意識の高まりへと繋がったといえる。

また高齢者施設では、働く若い職員と比べて対象者は入所者と年齢が近く、施設のレクリエーションで使う音楽や昔のスター等について「知ってることが同じ (SF3-1)」であることが多く、入所者との話がより弾むなど、若い職員にはできない楽しみを提供できる。また80代の入所者にとって、60代の協力者の年代は入所者の子どもの世代である。このため、「[入所者が}私たちと話したがる (SE1-3)」と、若い職員より協力者にコミュニケーションを求めてくることが多い等の経験があった。この結果、高齢者施設においては、一緒に働く若い世代が持っていない「高齢者の強みへの気づき」が得られやすかったと考えられる。

なお、[高齢者の強みへの気づき]については、トライアル就労だけではなく、絵画教室でも発言が比較的多かった。トライアル就労と絵画教室、2つの活動団体にある共通の特徴は若年世代との交流であった。トライアル就労は若い職員との交流があり、

絵画教室は教室に参加する若い世代との交流があった。このことから、「高齢者の強みへの気づき」は若年世代との交流がきっかけになる可能性が考えられる。この理由として、高齢者が持つ強みへの気づきとは、他世代と高齢者を客観的に比較できる環境において生じやすいと考えられるからである。しかし、本研究では、若い職員との交流によって高齢者の強みに気が付いたという関連を示唆する発言は得られなかったため、これについてはさらなる検討が必要である。

「健康に対する認識の変化」と「高齢者の強みへの気づき」というトライアル就労で得られた変化の特徴は、活動における自分に向けられた責任への自覚と、高齢者という存在の社会的価値への気づきであり、これは、新たに高齢者であることの存在意味を知ったという学習と捉えられる。

3) 個人の活動参加から地域・社会に対する学習へ
最後に本研究から抽出された、コアカテゴリー間の関係について考察する。

本研究は、2つのコアカテゴリー【自己に関する認識】と【環境に関する認識】が抽出された。

自己と環境の関係という視点から捉えると、【環境に関する認識】は、さらに「活動」に関する認識と「地域・社会」に関する認識の2つに分類できる。「活動」に関する認識とは、「友人・仲間の重要性への気づき」、「関与の重要性への気づき」、「高齢者の強みへの気づき」、「高齢期に伸びる能力への気づき」、そして「活動団体の実情の把握」であり、これらは活動参加に関わる学習である。

「地域・社会」に関する認識は、「社会に対する新たな視点」と「地域情報の入手」であり、より広範囲な地域と社会に関する学習である。社会参加を通して、自己だけではなく、地域・社会へと学習の幅が広がっていくことが見て取れる。

さらに、発言全体を通して見ると、これらが相互に関係していることが示された。「自己」、「活動」、「地域・社会」のつながりは、「自己」を中心にして、「自己」が参加する「活動」と関わる。さらに「活動」は団体に関連する「地域・社会」につながる(図1)。

具体的には、「自己」は「活動」を通じた認識変化によって「地域・社会」の理解をもたらし、「地域・社会」の理解は「活動」に対して新たな価値や捉え方への気づきを生む。さらに「活動」に対する新たな認識は、「自己」に関する価値や認識を新たに広げる。このように、「自己」、「活動」、「地域・社会」に関する学びが相互に関連する様子が本研究結果から捉えられた。

上記に示した関連について、典型的な3例を以下に示す。1つ目は、「関与の重要性への気づき」が「現

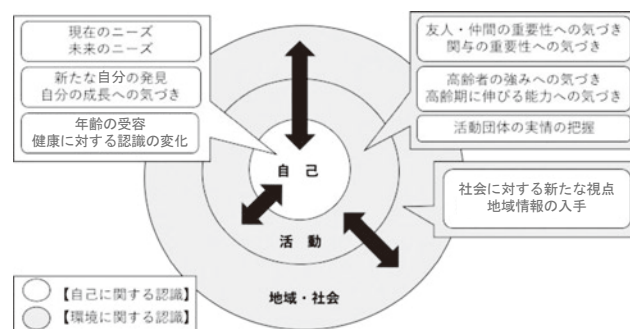


図1 「自己」「活動」「地域・社会」に関連する概念と関係

在のニーズ」へと発展した例である。2つ目は、「現在のニーズ」から「新たな自分の発見」へつながった例、3つ目は、「活動団体の実情の把握」が「社会に対する新たな視点」に発展した例である。

「実習があって {中略} 何が向いているのか、自分でなにができるんやというのを {中略} 自分で考える (KA1)」

「それでできたら満足感。役に立ってる (KA1)」

これは、高齢者大学の活動を通して主体的に取り組むことの大切さという「関与の重要性への気づき」があったことから、実際に主体的に活動へ関わっていく経験を通して、貢献できた喜びを感じた。この喜びによって、活動を通して貢献したいという「現在のニーズ」という〈今まで気づかなかったニーズ〉の気づきへとつながった。

「自分のための家事じゃない。誰かのための家事というのが良い (SD4)」

「現役で働いていた時には感じなかった、働くってこんな楽しいんや (SD4)」

これは生きがい就労を通して誰かのために仕事をすることにに対する満足感から、貢献に対する「現在のニーズ」への気づきがあり、さらに活動を継続していく中で貢献へのニーズが充足されることで、これまでの自分にはなかった働くことを楽しむことができる「新たな自分の発見」という自己に関する認識が広がった。

「{高齢者施設の} スタッフの方、確かに少ない (SD1)」

「今までは、{高齢者施設の虐待について} 新聞読んだりテレビ見たり、そうやねんと思うだけ。やる人は悪いことやけど、なんか落ち度が他にあったんかなとか思うようになりました (SD1)」

この例は、参加した高齢者施設の人材不足という「活動団体の実情の把握」が、社会で起こった事件の背後にある施設側の問題の可能性に目を向けられるようになったという、「社会に対する新たな視点」の獲得へ発展した。

このように、1つの認識の変化は別の認識へと発展していくことが見いだされた。また「自己」の認識と「地域・社会」の認識は、「活動」経験を介してつながっていることも見てとれた。

6. まとめと今後の課題

本研究では、高齢者大学と絵画教室、トライアル就労の活動に注目し、高齢者の活動を通じた認識や考え方の変化から、社会参加を通じた学習効果について検討した。さらに活動団体での比較を行い、それぞれの団体における活動を通じた変化に違いがあるかを検討した。

その結果、活動の種類によって学習効果に違いがあることが示された。さらに、高齢者大学と絵画教室という学習活動については、団体の活動内容の特徴に加え、参加者の参加動機や継続期間によっても、学習の内容に違いがあることが示唆された。このことから、社会参加を通じた学習に関する研究では、活動内容だけではなく、活動に集まった個人の参加背景や活動継続期間などの特徴を考慮する重要性が見出された。

本研究で検討した「活動を通じた認識と考え方の変化」は、健康や友人・仲間に関する結果が得られたが、これらはこれまで高齢者の社会参加の活動効果として捉えられてきた（片桐，2012）。しかし学習という視点を取り入れると、これまでの研究で示された活動効果は、社会参加への主体的な関与によって得られた効果である可能性が見いだされた。社会参加によって「健康になった」という活動効果は、学習を取り入れると健康への意識の高まりと捉えられ、「友人ができた」という活動効果は、学習を取り入れると仲間の重要性への気づきと捉えられた。学習効果の検討により、これまでの活動効果は、ただ社会参加することで健康になったというのではなく、社会参加を通じた自分の健康意識の高まりという学習効果によるもの、同様に、「友人ができた」という活動効果は、ただ活動へ参加することで友人ができたのではなく、仲間の重要性への気づきという学習効果によるものである可能性が示唆された。インタビュー調査では、調査協力者が活動へ主体的に関与することで、自分や他者、社会について考えたり感じたりした様子が語られ、さらに考えたり感じたりしたことが、認識や考え方を変化させるきっかけになったエピソードも語られた。これらのこと

から、主体的な活動への関与が、学習効果に影響する可能性、つまり社会参加は提供されたプログラム等に消費的に参加するのではなく、主体的に関与することによって学習効果が高まる可能性が示唆された。

本研究では、個人が活動を通して学習した、参加団体が持つ課題や問題への理解が社会全体の課題の理解へつながった様子も見いだされた。片桐(2017)は個人の社会参加を通しての変化が、個人とともに社会も変化し個人も社会も成熟する可能性につながると指摘している。本研究の結果からは、個人の変化が社会へつながる可能性が示唆されたのみに留まり、これが実際に社会に資する活動のきっかけになり得るのかについては明らかにすることはできなかった。今後のさらなる研究が必要である。

最後に本研究の限界として、以下の点が上げられる。まず調査協力者の選出において、条件に合った対象者の選出を施設担当者に依頼したことや、調査者の知人からの紹介があったことから、調査への積極性の高さや、調査協力の依頼のしやすさ等で調査協力者に偏りがあった可能性が考えられる。加えて施設ごとの協力者の人数や性別にも偏りがあったため、今後は対象を広げるなど協力者の偏りを減らすための選出方法の改善が必要である。

高齢者の活動は多様であるが、本研究では高齢者大学、絵画教室、高齢者施設におけるトライアル就労の3種の活動団体からの検討のみであり、他の活動は検討できていない。このことから、高齢者の社会参加について検討するには限定的であった。特に絵画教室以外の趣味、高齢者施設以外での生きがい就労において、本研究と同様の結果が得られるのかは明らかではない。今後は、より多様な種類の活動から、活動内容によって系統的な違いを検討する必要がある。

学習効果の検討について、インタビュー調査や分析は、これまでの経験、家族や友人関係、生活環境等、活動以外の条件による影響を確認しながら行ったが、これらの条件を統制して学習効果を検討するためには、今後は量的な研究方法による検討も必要である。また学習効果は個人の条件だけではなく、活動の主催者側の意図やそれに基づく参加者への働きかけ、友人関係等、学習に影響を与える外部要因があることが考えられる。しかし本研究では学習の種類からの検討であったため、今後は外部要因の影響等、他の影響要因からの検討も必要である。

付記

本研究に快くご協力いただいた宝塚市役所 健康福祉部 安心ネットワーク推進室 地域福祉課の担当者の方々、介護施設の担当者の方々、ならびに高齢

者大学の参加者の皆様、絵画教室の参加者の皆様、「宝塚市健康・生きがい就労トライアル」参加者の皆様に深く感謝申し上げます。なお、本研究はJSPS科研費(17H02626)および前川ヒトづくり財団(MHF2019-A007 安里知陽)の助成を受けて実施したものです。

引用文献

- Chen, L. (2016). Not just Helping: What and how older men learn when they volunteer. *Educational Gerontology*, 42(3), 175-185.
- 藤岡英雄. (2008). 学習関心と行動—成人の学習に関する実証的研究—おとなの学びの行動学第2部. 学文社.
- Glendenning, F. (2001). Education for older adults. *International Journal of Lifelong Education*, 20(1-2), 63-70.
- 堀薫夫. (2012). 教育老年学と高齢者学習. 学文社.
- 石崎和宏・王文純. (1999). 美少年の美的感受性の発達とその評定法に関する一考察. *美術教育学会誌*, 20, 35-45.
- Jarvis, P. (1987). Meaningful and meaningless experience: Towards an analysis of learning from life. *Adult education quarterly*, 37(3), 164-172.
- Jarvis, P. (1995). *Adult and continuing education: Theory and practice*. Psychology Press.
- 片桐恵子. (2012). 退職シニアと社会参加. 東京大学出版会. 片桐恵子. (2017). 「サードエイジ」をどう生きるかシニアと拓く高齢先端社会. 東京大学出版会.
- Knowles, M. S. (1984). *Andragogy in Action. Applying Modern Principles of Adult Education*. Jossey Bass.
- 小長谷陽子, 渡邊智之, & 小長谷正明. (2013). 地域在住高齢者の認知機能と社会参加との関連性—社会活動および社会ネットワークを中心として—. *Dementia Japan*, (27), 81-91.
- 牧野篤. (2009). シニア世代の学びと社会—大学がしかける知の循環. 勁草書房.
- Merriam, S. B., Caffarella, R. S., & Baumgartner, L. M. (2007). *Learning in adulthood: a comprehensive guide* (3rd ed.). Jossey-Bass.
- Moody, H. R. (1986). Late life learning in the information society. In D. A. Peterson, J. E. Thornton, & J. E. Birren (Eds), *Education and aging*. Prentice-Hall. 122-148
- Morro-Howell, N., Kinnevy, S. & Mann, M. (1999). The Perceived Benefits of Participating in Volunteer and Educational Activities. *Journal of gerontological social work*, 1(1), 65-80.
- 内閣府. (2021). 令和3年度版高齢社会白書.
- 内閣府. (2017). 平成29年度版高齢社会白書.
- Parsons, M. J. (1987). How we understand art: A cognitive account of the development of aesthetic understanding.
- 佐伯胖. (1975). 学習の構造. 東洋館出版社.
- 佐藤郁哉. (2008). 質的データ分析法 原理・方法・実践. 新曜社.
- 瀬沼克彰. (2010). [21世紀の生涯学習と余暇] 高齢者の生涯学習と地域活動. 学文社.
- 瀬沼克彰. (2014). 地域をひらく生涯学習. 日本地域社会研究所.
- 末本誠. (2016). 社会教育研究における方法論議の今日的意味—解釈論的アプローチを中心に—. 日本社会教育学会年報編集委員会(編) 日本の社会教育第60集 社会教育研究における方法論. 東洋館出版社.
- 田中雅文. (2011). ボランティア活動とおとなの学び 自己と社会の循環的発展. 学文社.
- 山口初代・大湾明美・佐久川政吉・田場由紀・榮口咲・大川嶺子・糸数仁美・坂東瑠美・前泊博美. (2014). 男性高齢者の「生きがい就労」の実態とニーズ: A 島の当事者の語りから. *沖縄県立看護大学紀要*, (15): 43-51
- World Health Organization (WHO). (2021). Active ageing: a policy framework. <https://apps.who.int/iris/handle/10665/67215?locale-attribute=en> (2021.12.7.)
- World Health Organization (WHO). (2021). World health statistics 2021: monitoring health for the SDGs, sustainable development goals. World Health Organization 2021.